

イザヤ 59 章 9-19 節

ヘブル人への手紙 5 章 12-6 章 2、9-12 節

マルコによる福音書 10 章 46-52 節

本日の旧約日課は、先週に続き「イザヤ書」です。この「イザヤ書」は、三大預言書の一つですが、バビロン捕囚の前後の数世紀にわたり、複数の著者によって書かれています。本日の箇所は、バビロン捕囚の後に書かれたと推測されます。聖書日課は、[] の中を補っても、省略した部分がありますので、59 章全体から学んでいきたいと思えます。

59 章の背景にもバビロン捕囚とその後の出来事が関連しています。そのことについて簡単に触れてみますと、ペルシア王クロスによってバビロン捕囚が終了し、イスラエルの人々・ユダヤ人は苦難から解放されます。その後、ペルシア王の許可のもと、神殿を再建し、信仰と集団としてのまとまりを回復しようとしてつとめます。神殿再建に関連する出来事は、「エズラ書」、「ネヘミヤ書」に詳しく書かれています。神殿再建によって課題達成、すべてが丸く収まったわけではなく、その後もイスラエルの人々・ユダヤ人の苦難の歴史は続きます。ペルシアがギリシアとの戦争（いわゆるペルシア戦争）に突入し、パレスチナの地は再び混乱の中に入ってしまったからです。

神殿を再建して歩み始めたのにもかかわらず、社会では混乱と苦難が続き、決して安定した生活を得られなかったためでしょうか、イスラエルの人々・ユダヤ人たちの間では、主なる神様に対する不満が現われたようです。そして、それに対する主なる神様の答えが、本日の 1 節から 4 節に現れているのです。

「**主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない**」（イザヤ 59：1）から推測しますと、イスラエルの人々・ユダヤ人たちの主なる神様への批判がわかります。面白いと言っては失礼かもしれませんが、彼らは、主なる神様の手は短いから、わたしたちを救ってくれないのだ、主なる神様は、もう耳が遠くなったので、わたしたちの祈りを聞いてくださらないのだというような不満を言っていたようです。

それに対する答えは、2 節にあります。そこでは「**むしろお前たちの悪が、神とお前たちとの間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させ、お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ**」とあり、現在ある混乱と苦難は、人間の側の罪と不義と悪が、主なる神様の業の妨げになっていることが原因だと語っています。3 節から 8 節までには、人々の罪と不義と悪が、具体的にどのような事柄であるかを語っています。それは、言い換えれば、人々が作り上げ、暮らしている社会に欠けているものでした。具体的に言えば、「**正しさ（正義）**」と「**真実**」（「**正しい訴えをする者はなく真実をもって弁護する者もない**」59：4）、「**平和**」と「**公平な**

裁き」(「彼らは平和の道を知らずその歩む道には裁きがない。彼らは自分の道を曲げその道を歩む者はだれも平和を知らない。」59:8)でした。そして、それらを欠いた結果、「破壊と崩壊がその道にある」(59:7)と述べられているのです。

この部分の著者は、9節から15節前半で、この希望のない状態を嘆いています。それは、「それゆえ、正義はわたしたちを遠く離れ、恵みの業はわたしたちに追いつかない。わたしたちは光を望んだが、見よ、闇に閉ざされ、輝きを望んだが、暗黒の中を歩いている」(9節)で始まります。そして、「まことは失われ、悪を避ける者も奪い去られる」(15節前半)で終わっています。そこに記されている事柄は、単純に主なる神様を信じなくなってしまう状態だけではありません。自分の願望通りに主なる神様が何かをしてくださらないことへの不満、主なる神様を信じるように振舞いながら正義も公平もない状態なども描かれています。また、この箇所著者は、単に嘆いて終わっているだけありません。主なる神様がこの状態を喜ばれないという確信があります。それが15節後半から描かれています。

著者は、「主は正義の行われていないことを見られた。それは主の御目に悪と映った」(イザヤ59:15)と述べ始めます。「主の目に悪」という表現は、旧約では各所に見られますが、イザヤ書ではこのみです[「わたしの目に悪」(65:12、66:4)はある]。ただしこの訳は、以前の口語訳では、「**主はこれを見て、公平がなかったことを喜ばれなかった**」とあり、新しい聖書協会共同訳では、「主はこれを御覧になり、公正がないことを不快に思われた。」となっています。直訳しますと、「主はそれを見た、それは(公正な)裁きがないように、不快に(悪に)映った」となります。新共同訳は、この箇所にある「裁き」に当たることばを「正義」と訳しており、それは11節と14節で「正義」と訳されている個所と同じです。ただし、9節で「正義」と訳されている言葉とは異なります。意味的には、口語訳や新しい聖書協会共同訳の方が元来の意味に近いのですが、「(公正な)裁判が見られないこと」とは、「正義が行われぬ」ことでもありますので、この箇所からくみ取るべきことは、この地上で人と人との間に正義と公正が行われぬことであり、主なる神様がそのことを見逃さないということです。

そのような状況の中で、主なる神様は、「主は人ひとりいないのを見、執り成す人がいないのを驚かれた」(イザヤ59:16)のですが、そのままにしておくわけではありません。「主は贖う者として、シオンに来られる。ヤコブのうちの罪を悔いる者のもとに来る」(イザヤ59:21)からです。そして、「これは、わたしが彼らと結ぶ契約である」と前提したうえで、この文書の著者である預言者を通して、「あなたの上にあるわたしの霊、あなたの口においたわたしの言葉は、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、あなたの子孫の子孫の口からも今も、そしてとこしえに離れることはない」と語られるのです(イザヤ59:21)。

この59章をまとめてみますと、主なる神様は、自らの義を守り、イスラエルの人々・ユダヤ人をその地上の行いによって報いる方である。ことに主の霊

をあらわし、贖う者を出現させ、新しい契約として、その人に「霊と言葉」を与えると語っています。「霊と言葉」を与えられた執り成すもの、贖う者が誰であるかここでは明確ではありません。新しい預言者、あるいは先週の53章の「主の僕」かもしれません。その意味では、この箇所自体が指し示しめしていることは、王国の崩壊、バビロン捕囚、神殿を再建、変わらない混乱と苦難、そして不安、それらがあっても、イスラエルの人々・ユダヤ人が大切にすべき事柄は、主なる神様への信仰であり、地上において正義と公平を実現することだということです。そして、そのような歩みの中に、主なる神様は、執り成すもの、贖うものを遣わされ、イスラエルの人々・ユダヤ人に平和をもたらす。そのことを確信、また信じながら待ち続けるということです。

わたしたち教会に集められるものにとって、このイスラエルの歴史は、直接わたしたち自身の歴史ではありません。逆に、この執り成すもの、贖うものとは、わたしたちにとっては、主イエス・キリストにほかなりません。その意味でここに見られるこのようなイスラエルの人々・ユダヤ人の歩みは、わたしたちとは無関係であるにとらえることでもなく、わたしたちは執り成す方、贖う方が明確におられるので安心だと結論付けるのもなく、イエス様が現れる約500年前の、主なる神様と信仰者との関係から何かを学ぶことが大切であると思います。

そのように考えます時、本日のイザヤ書の59章から一つのことを学びたいと思います。それは、主なる神様に嘆くことの意味です。本日の箇所の背景に、この地上の出来事に対して、主なる神様は、救いを示さないのか、そのような救いの力がないのかという嘆きがありました。しかし、本日の箇所が示している事柄は、この地上にある混乱と苦しみが、自然に発生したような事柄ではなく、自分たちの歩みの結果であるということです。この世界の苦しみに、人間の罪と不義の結果であるものがあり、それゆえに人間の個人の問題に結びついている。それゆえにその問題の責任を、他者・社会に転嫁せず、自分たちの問題として考えなくてはならないということです。人間は、自分自身ではなかなかそのような理解に至らないかもしれませんが、主なる神様を信じる時、そのような視点が与えられるともいえます。そして、そのように自覚するとき、主なる神様がこの地上の事柄を見ていないわけではなく、「霊」と「言葉」を与えた、執り成すもの、贖うものを通して、救いをもたらして下さるという確信につながるということです。

また、先のことと矛盾するように思えますが、ただ嘆きつづることの大切さも、この箇所は示していると思います。本日のイザヤ書の背景にあるような事柄ではなく、大きな自然災害や不慮の事項のように、地上の誰にも責任を問えないような苦しみと悲しみについて、主なる神様に責任を問いただし続けるということです。この箇所は、そのような嘆きであっても、主なる神様は必ず応えてくださると示しているからです。そこにおいても主なる神様が、「霊」と

「言葉」を与えた、執り成すもの、贖うものを通して救いが与えるということです。

本日の「イザヤ書」は、執り成すもの、贖うものに「霊」と「言葉」が与えられると語っていますが、ここでの「霊」は、「息、空気、命」をも意味する言葉です。それに近い言葉に、「魂」があり、こちらは「息、命」を示します。両者とも主なる神様から発生し、主なる神様が人間に与えるものであり、同じような意味ともいえるのですが、これら「霊」と「魂」という言葉は、訳語を含めると文化によっていろいろと区別ができますが、「旧約」的背景から考えますと、「霊」は、人間が共有するものであり、「魂」は各個人一人ひとりが保持するものといえます。また「言葉」は単に話す言葉であると同時に、主なる神様の言葉、教え、知恵、そして律法も示します。ここでは、それらすべてをとらえてよいと思います。つまり、主なる神様は、嘆き続ける人々をすべて「霊」を通して包み込んで守り、知るべき事柄と歩むべき道を「言葉」を通して示して下さる。それを執り成すもの、贖うものを通して実現して下さるということです。そして、その先にあるものは、主なる神様の目に正しい平和にほかなりません。

本日の福音書は、目が不自由であったバルティマイが、イエス様がおられると聞いて、叫ぶ続ける箇所です。その叫びは、わたしたちが礼拝で唱える「キリエ・エレイソン」の起源と言われます。その叫びは、旧約日課「イザヤ書」が示す人々の嘆きの声とは異なりますが、主に対する嘆きの叫びにはほかなりません。それゆえその叫ぶ声を通して、その場所全体に霊的な何かが起こりつつあったといえます。しかし、「**多くの人々が叱りつけて黙らせようとした**

(マルコ 10 : 48) とある通り、弟子たちを始めとして、その場にいる人たちは、逆に彼を押しとどめようとしてしました。それは霊的な何かが起こることを抑えてしまうような行為でした。しかし、イエス様は彼を呼び寄せ、「**何をしてほしいのか**」(マルコ 10 : 51) と問いかけて希望を聞きます。そして、「**行きなさい。あなたの信仰があなたを救った**」(マルコ 10 : 52) と言葉だけで、奇跡が起こります。主なる神様に対して、叫び続ける大切さ、たとえ嘆きであっても、その大切さを示している箇所といえると思います。

わたしたちは主なる神様に呼ばれて、教会に集められる存在です。それゆえに、主なる神様のために何かをすることを促されている存在です。同時にその主なる神様との関係において、主なる神様に様々な事柄を問いかけてよい存在です。そして、教会の内外で叫ばれる嘆きに対して、執り成す存在でもあります。わたしたちは、イエス様のように奇跡を起こすことはできませんが、世界中で起こる問いかけや叫び、それらが解決するために、祈り続けることはできます。それが主なる神様に呼ばれたわたしたち第一にすべき事柄です。これからも、わたしたちの祈りが、具体的な形になることを確信しつつ、毎週の礼拝を大切にしたいと思います。